

**LANGUAGE
AND SILENCE
GEORGE STEINER**

言語と沈黙

下

G・スタイナー

由良君美他訳

せりか書房

**LANGUAGE
AND SILENCE
GEORGE STEINER**

言語と沈黙 下 G・スタイナー 由良君美他訳 せりか書房

言語と沈黙 下

定価 1500 円

1970年10月30日発行

著者 ジョージ・スタイナー

訳者 由良君美 他

発行者 菅原 敏

発行所 株式会社 せりか書房

東京都文京区後楽 2・20・15 内野ビル 電話 813:8566~7 振替 東京143601

印刷 株式会社 厚德社

製本 神田錦町 橋本製本

装幀 平野甲賀

1970 ©

0098-61202-3894

言語と沈黙
下巻
目次

言語と沈黙 下

巨匠たち

F・R・リーヴイス ————— 9

神話をたずさえるオルペウス クロード・レヴィ・ストロース ————— 44

マーシャル・マクルーハンを読むには ————— 67

小説と現在

絹のジャングル 谷崎潤一郎の『鍵』 ————— 83

陰影と細心 サミュエル・ベケット ————— 90

屠殺の使喚 セリーヌ ————— 110

メリメ ————— 129

トーマス・マンの『フエリクス・クルル』 ————— 144

ロレンス・ダレルとバロック小説 ————— 165

モニュメントの建立——182

死ぬことも一つの芸術——194

マルクス主義と文学

マルクス主義と文学批評家——215

ジェルジ・ルカーチと悪魔の契約——251

美的共産党宣言——280

中央ヨーロッパから離れて——294

作家と共産主義——309

トロツキーと非劇的想像力——327

文学と「歴史の終熄」以後——361

エリアス・カネッティ その『大衆と権力』——383

批評はアウシュヴィッツのあとに 解説に代えて——395

訳者あとがき——427

言語と沈黙 上巻

日本の読者に

はしがき

人文教養

人間をまもる読書

言葉からの退却

沈黙と詩人

英国紳士の教化のために \blacktriangle 英文科 \blacktriangledown はこれ

でいいのか

夜の言葉 高級好色文学と人間のプライヴァ

シー

ピタゴラス的ジャンル エルンスト・プロツ

ホ生誕七十五年を記念しての憶説

闇からの言語

空洞の奇蹟

ギュンター・グラスに関する覚え書き

K

シェーンベルクの『モーセとアロン』

ある意味での生きのこり エリ・ヴィーゼルに

ある意味での生きのこり・補遺

古典

ホメーロスと学者たち

聖書

シェイクスピア生誕四〇〇年祭

翻訳二篇

言語と沈黙 下巻

巨匠たち

F・R・リーヴィス

格式ばったところは全然ない。ただひとりのドン、声も背丈も貧弱だがその強烈さには忘れ難いところのあるひとりのドンがケンブリッジのある講堂の講書台を離れて、いかにも彼らしい柔軟で無頓着な足どりでドアを排して出ていくだけのことだ。

しかしリーヴィス博士が最終的にミル・レインから去る時には、イギリスの感受性の歴史における一時期が終ることになるだろう。おそらくヴィットゲンシュタインやR・H・トーニーの場合同じように、リーヴィスの隠退は、つまり彼がケンブリッジで教えなくなるといふことは、感情の歴史の上で複雑にして論争をまき起こしやうい一章を画することになるだろう。

ひとりの文学批評家が時代精神の動向を変えるのにこれほどまでも尽くしたということ、つま

り彼が文学上の趣味の進展に対して彼独自の容赦のない抽象的な歩きっぷり——彼は自分の思想を外に表わして歩くのだが——を大いに押しつけたということは、それだけですでに目ざましい事実である。普通に認められている意味では文学批評がこれほどまでも重要であることはない。たいていの批評家たちは文学の実体を食いものにしてている。彼らはいわばお付きであり、居候であり、ライオンの影である。まず作家たちが本を書き、いつもそのあとではじめて批評家たちが本について書く。この両者のちがいは広大なものである。批評が後世に残る場合には、その批評が創作と対になるものであるため、つまりコールリッジやT・S・エリオットのようなひとびとの詩のもつ力が彼らの下す判断に個人的な体験からくる権威を与えているためか、それともその批評が思想史の上で注目すべき時機を示しているためである。『詩学』のもつ活力は歴史的なものである。この力はアリストテレスが実際に引用している作品のわずかな部分をわれわれが知っているかどうかということとはそれほど関係がない。批評の大部分はごく短命なもので、ジャーナリズムないしはまっとうな文学史に近いものから、ほんのしばしの個人的な印象のほとばしりに近いもの、あるいは伝統や博識をふりまわした退屈な警告に近いものなどがある。自分ひとりの力で生き永らえる批評家はほんの少ししかない。このようなひとたちは——ジョンソン博士、レツシング、サントロブーヴ、ベリンスキー以外にいったい幾人あるだろうか？——批評を必要な社会的知性の営みとした。彼らは個々の文学上の例から発して遠く倫理的、政治的な議論のおよ

ぶはてまでも仕事を押しすすめたのである。

リーヴィスの場合も根本的にそうであった。『ユリシーズ』について書いていた時にエズラ・パウンドは「われわれは言葉に支配されている。法律は言葉で書かれている。そして文学はこれらの言葉を生きた正確なものにしておく唯一の手段である」と断言した。リーヴィスならばこれに、批評だけが文学にそのような仕事をさせることができるかと付け加えることだろう。このような、批評は人文学の中心であり、技術的であるばかりでなく倫理的、社会的でもある価値を提示し守護するものであるという見方の背後には、批評の方法についての複雑で明確な理論がある。

リーヴィスにとって批評家とは完全な読者である。すなわち「理想的な批評家は理想的な読者である。」彼は詩人なり小説家なりの言葉によって与えられる経験を充分に感じとる。彼は完璧に反応できる状態、つまりテクストとの出会いに際して意識が一種の安定した敏感性を保つことを目標とする。彼は綿密で厳しくはあるが同時に暫定的でいつでも評価の変更が可能であるような注目の仕方をしてながら読み進んでゆく。判断は反応から生ずるが、判断が反応を起こさせることはない。

「批評家の目標はまず第一に自分の注意をひくあれこれのものをできるだけ敏感に、完全に感じとることである。この感じとりの過程の中にはある種の価値づけが含まれている。新しいも

のについての経験が熟してゆくにつれて批評家ははっきりとまた暗黙裡に「これはいい」とこからくるんだらうか？　これは……とどんな関係があるんだらうか？　これは相対的にみていったいどれくらい重要にみえるだらうか？　Vなど、と問うてみる。このようにして「位置づけられた」結果それが構成要素となって定着するところの組織体は、同じようにして「位置づけられた」ものからなる組織体、つまり相手との関連においてはじめてそれぞれの相対的位置が定まったようなものからなる組織体である。そしてこれは理論にもとづいた組織あるいは抽象的な考慮によって決まる組織ではない。」

この批評的判断（つまり「位置づけ」）を提出するに当っては「こうではありませんか？　Vという問いかけが同時に行なわれる。そして批評家が求めているものは「確かにその通りだけれどもしかし……」Vという条件付きの賛成であり、これによって批評家は自分自身の反応を吟味し精密化するよう求められ、稔り多い対話に導かれることになるだらう。この対話という概念はリヴィスの中心思想である。芸術家に劣らず、いや実は芸術家以上に、批評家は読者を必要としてゐる。読者がなければ理想的な読書という行為、批評的な感受性を働かせて芸術作品を再創造しようとする試みも、独断的な印象か単なる断定となってしまう運命にある。共同社会の中では、活発に協力しあって文学に対して熟した反応ができるよう努力しているひとかたまりの読者が存

在しているかあるいは訓練によって創り出されなければならない。そのような場合にはじめて批評家は、反対意見をも創造的なものとしてしまふほどの充分な賛成をもとにして仕事をすることができる。言語それ自身が共同社会の最高の営みである。個々の詩はそれぞれ第三の領域Vに、つまり詩人における言葉の私的な用法と同じ言葉が一般のはなしことばの中でのとる姿とのこの両者から複雑なそして決して一定不変ではない距離をおいた地点に存在しているのである。批評的に感じとられるためには文学作品は完全な読者を見出さなければならぬ。しかしそのような読者（批評家）は、彼にひけをとらぬような洞察への努力が彼のまわりのどこかで行なわれている場合にはじめて、自分自身の反応を活発化しまたその正しさを確めることができる。

このような努力は社会の運命に直接関係する。リーヴィス一生の仕事を貫く根本原理は、人間の芸術に対する反応能力と人間生活に対する一般的な適合性との間には密接な関係があるという確信である。この反応能力は批評家によって目覚まされ豊かにされうるものである。感情についての理解能力は人間的な事柄において健全な判断を下すために欠くことのできないものである。「政治上、社会上の問題について考えるのはある本物の文学教育を受けた人びとによって行なわれるべきであり、それはまたいきいきとした文学的な文化によって活気づけられた知的雰囲気の中で行なわれるべきである。」ある社会の中に有意義な現代文学とそれに並行した活発な批評活動がない場合には、「『精神』（この精神には記憶が含まれているが）が完全に生きていない」とい

えない。」要するに、文学批評についてのリーヴィスの考えはほかの何ものにもまして生きた人文的な社会秩序のための訴えである。

したがって彼は大学という概念にとほうもない重要性を附与する。ニューマン（彼こそリーヴィスの文体と方法に本当に著しい影響を与えた一人であるが）と同様にリーヴィスは、理想的な大学とは国家が健全に創造的に機能を果すよう維持しうる精神のエネルギーを養う根であり土であると考えている。彼の批評は教育との関連において生れてきた。だから『再評価』の序文のおしまいに出てくる次のような言葉はまったく額面どおりのものである。

「わたしが感謝したいのはわたしが過去十二年間、教師としてともに文学を論じ合ってきた人びとに対してである。わたしが有益な議論の仕方について何かを学んだとすれば、それは彼らとの共同作業においてである。」

リーヴィスが、大学人（V）をいみきらい、予言者的なあざけりを浴びせかける機会を決して逃しはしないとしても、それは、彼がオクスフォードやケンブリッジは現在の有様では教育の真の欠くべからざる機能をほとんど果していないと信じているからである。しかし彼は憤慨しながらも献身的にその内部に留まった。